

210321八栗シオンキリスト教会礼拝宣教参考資料～キリスト教史近現代②

	時期	出来事
古代	1-5世紀 西ローマ帝国滅亡まで	①ローマ帝国によるキリスト教の迫害 ②教会内部での異端の問題 ③教会会議、正統的信仰の確立
中世	5-15世紀 宗教改革まで	①教皇権の絶頂期（インノケンティウス3世） →ヨーロッパ社会における教会の存在感の高まり ②西欧での修道院制の始まり（ベネディクト会、托鉢修道会） ③スコラ学の誕生（アンセルムス、トマス・アキナスなど）
近世	16世紀 宗教改革	①ルターの回心、カルヴァンの改革 ②プロテスタント諸教派の誕生（ルーテル派、改革派、再洗礼派、イングランド国教会） ③カトリックの対抗宗教改革 ④植民地主義と緊密な関係をもった海外宣教（15～19世紀）
近現代	16世紀後半～現代	①教派の正統主義化、敬虔主義運動（16世紀後半～18世紀） ②ヨーロッパの近代化（主権国家体制、政教分離、資本主義経済、啓蒙主義）とキリスト教の関わり（17-19世紀） ③全体主義との闘い、戦後の課題（植民地支配後の教会、民族・宗教対立、生命・環境問題）（20世紀以降）

1. 二つの世界大戦と全体主義

① 第1次世界大戦



- 1914年に「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれたバルカン半島においてオーストリア皇太子夫妻の暗殺をきっかけに開始。
- 当時、バルカン半島諸国は現在のトルコに位置するオスマン帝国が支配していたが、その力が弱体化し、各国が独立を求め始め同盟を組んで、オスマン帝国と戦い独立を果たしていった。しかし、領土をめぐる問題や他のヨーロッパ諸国の思惑もあり緊迫した状態が続いていた。

- 第一次世界大戦の最大の特徴は、長期戦かつ総力戦。
- 産業革命後、ヨーロッパ社会は高度に発展し、戦闘を続ける能力が高まった。戦争が長期化すれば、国民にも影響が出てくる。政府が経済活動を規制し、市民生活に介入し、国営企業ばかりとなり、戦争ために国を挙げて一致していく。自由主義、個人主義からの全体主義への流れ。
- 4年半に及ぶ戦いで30カ国、6500万人の兵士を巻き込み、1600万人が戦死。民間人の死者は含まれていないので、もっと多くの人々が亡くなっている。
- 第一次世界大戦前は、軍事力、経済力、政治制度や文化でにおいてもヨーロッパこそが文明の最先端であるという認識（理想）があった。しかし、4年半に及ぶこの世界大戦は、こうした認識を根底から揺り動かすことになった。理想とされた近代ヨーロッパ社会というものが崩れ始め、このことは思想面において大きな変化をもたらした。

## ② 全体主義の進行

- 第1次世界大戦で敗れたドイツ、戦勝国ではあったが近代化に遅れたイタリアや日本では全体主義が進行。
- 他の列強諸国に追いつくために、近代を乗り越え、国家を強力に結合する民族理念への要求が高まり、全体主義という形で現れていった。
- ドイツではヒトラー率いるナチ党が議会で多数派をとり、一党独裁体制を進め、イタリアではムッソリーニに率いるファシスト党による一党独裁、そして、日本では軍国主義による全体主義化が徐々に強まっていく。
- ロシアでは社会主義という形で全体主義が見られるようになった。
- 産業革命、資本主義により、社会に様々な問題も起きた。一番の問題は資本家と労働者の関係。貧富の差はどんどん拡大していった。これに異議を唱えたのが社会主義思想。
- カール・マルクスの共産主義思想。マルクスは貧富の差を生み出すのは、土地や工場などの生産手段などを所有していることが根本にあると考えた。
- それゆえ、生産手段をもたない無産階級（プロレタリアート）が有産階級（ブルジョワジー）の支配する世の中を革命によってひっくり返すことを主張した。
- 国家が生産手段を独占し、国民がみな平等になり、貧富の差はなくなる。さらに、こうした考えが全世界に広まっていけば、いずれ国家というものも必要なくなり、国家は死滅すると考えた。こうした理想社会を共産主義社会と呼んだ。社会主義は共産主義社会を目指す途中のこと。
- ジョン・ロックとマルクスの考えは対立。ロックは私有財産を認めたが、マルクスは否定した。資本主義は貧富の格差を生むが、共産主義はみんな平等であるが、勤労意欲が失われる。
- 第一次世界大戦中にロシア革命が起きて、ロシアは世界初の社会主義国家となった。指導者レーニンはロシアで社会主義革命を起こせば、それをきっかけにして、ヨーロッパ全体で革命が起きると確信してしたが、そうした革命は起きなかった。

## ③ 全体主義と差別～反セム主義

- 全体主義による大きな禍根はナチズムによるユダヤ人の虐殺（ショアー）。
- ユダヤ人に対する差別は「反セム主義」と言われる。ユダヤ人はセム人の子孫。ノアの子どもはセム、ハム、ヤペテ。セムの子孫からアブラハム、ヤコブが生まれ、12部族が誕生し、ユダヤ民族が誕生。セム人を否定するということで「反セム主義」と言われる。
- ヨーロッパでは16世紀からユダヤ人に対して特別区への隔離政策がとられた。
- しかし、主権国家体制が敷かれ、それぞれの国で宗教に対する寛容論が説かれるようになり、ユダヤ人に対しても市民権を与えようという声が出てきた。

- そして、フランス革命とナポレオン戦争をきっかけにして、ユダヤ人の解放が、フランスからヨーロッパ諸国へと広がった。
- そして、19世紀の後半にはユダヤ人市民としての基本的人権を得ることに至った。
- しかし、ユダヤ人の法的に他のヨーロッパ人と同じであるということが完了した直後に、ユダヤ人に対する差別が出てきた。
- それを象徴的に表す出来事がドレフェス事件。
- ユダヤ人の軍人ドレフェスにスパイの容疑がかかった事件。彼は無罪だったので冤罪事件。真犯人をかばうために反セム主義をあおる軍部と、それを批判する知識人の間で国民を二分する政治問題となった事件です。
- 反セム主義はナチズムの人種隔離政策によるユダヤ人虐殺（ショアー）につながっていく。

一般に信じられているところとは違い、ユダヤ人が集団虐殺の犠牲になったのは、彼らが同化の努力をしたにもかかわらず虐殺政策から逃れられなかったのではない。そうではなくて、この同化努力自体に対する反作用として虐殺が行われたのだ。ユダヤ人が非ユダヤ人化すればするほど、彼らはより恐怖の的になった。彼らの出身がばれないようになればなるほど、反ユダヤ主義の世論が彼らに投げかける呪いは激しさを増した。小坂井敏晶『民族の虚構』41

- 近親性と憎悪は隣り合わせ。近い者ほど、同化が進むほど、その反作用として、排除しようとする人間や社会の心理が働く。

## 2. 全体主義とキリスト教〜カール・バルト、ドイツ告白教会闘争

- 第1次世界大戦が起きて、ヨーロッパの教会は戦争を支持する。カール・バルト（スイス人）は教会や自分の恩師たちが次々と戦争を支持することを表明していくことに大きな衝撃を受け、深く失望する。

1914年8月初旬のある日は私の記憶の中に暗黒の日として刻印されている。ドイツの知識人93名がヴェルヘルム二世およびその側近たちの戦争政策を支持する宣言を発表して世論を誘導した。その知識人の中に私が尊敬してやまなかった神学の恩師たちの名を見出して戦慄した。このことが示す時のしるしに絶望し、私はもはや彼らの倫理学も教義学も、あるいは彼らの聖書理解も歴史理解も受け入れることはできないとその場で理解した。少なくとも私にとって19世紀神学は将来のないものとなった。

- バルトは大戦前までは自由主義神学に魅了され、可能性を覚えていたが、大戦を通して、自由主義神学には未来がないとし、離れていく。
- バルトはこれからの新しい世界を求めて、聖書を隅々まで読み直し二つのことを再確認した。
  - ① 聖書とは歴史、宗教、道徳といった人間のことについて書いたものではなく、神ご自身について書かれたものであること
  - ② 神と人間の境界線を明確に引くこと
- こうした問題意識もふまえて、バルトは『ローマ書講解』を書いた。当時のキリスト教界に大きな衝撃をもたらした。
- ナチスの政治権力が強まるにつれて、それを支持するプロテスタント・カトリック教会も多くなってきた。彼らはドイツ・キリスト者と呼ばれた。

- ドイツ人が優秀であり、ドイツ人の人種的純粋性を守るべきこと、共産主義やユダヤ人をはじめとしてドイツ人の優秀性を認めない人々に断固として反対すべきであると主張した。
- 政権はニュルンベルク法を作り、その中にアーリア条項を設け、それを教会にも押し付けた。非アーリア人とはユダヤ人。アーリア人あるいは非アーリア人と結婚した者を教会が雇用してはならないということ。
- こうした動きに対抗する反対運動として、マルティン・ニーメラーがボンヘッファーらと共に牧師緊急同盟を結成した。
- さらに、国家主義政策を教会に押し付けることに抵抗するために、信仰告白を作成することになり、バルトが中心となり、バルメン宣言を完成させた。
- ナチスが神格化されるほどの権力をもつ中で、イエス・キリストこそが唯一の服従すべき神の言葉であると告白した。ナチスに反対することは国家に対する反逆であると多くの人々に考えられていた時代にあって、バルメン宣言を出したことは、非常に勇気のあることであり、教会の歴史上、注目すべきこと。
- しかし後にバルトはバルメン宣言の欠点を指摘する。それはユダヤ人問題に言及しなかったこと。アーリア条項が問題であることにはふれなかったこと。ナチズムの国家主義による偶像崇拜の問題には抵抗するも、ユダヤ人差別の問題には踏み込めなかった。

### 3. 大戦後（20世紀後半以降）のキリスト教界

#### ① 植民地支配からの独立とキリスト教

- 20世紀に入ると、キリスト教はアジア、アフリカへと急速に広がる。

	1900年	2000年
アフリカのクリスチャン人口	1000万人	4億人弱
アジアのクリスチャン人口	2000万人	3億人弱

- 植民地支配からの独立後の教会の課題

(1) 差別や貧困などの社会問題

(2) 信仰の土着化（韓国…儒教、シャーマニズム、仏教との対話。アフリカ…治癒の文化）

#### ② エキュメニカル運動の進展

- 19世紀はプロテスタント諸教会の宣教が拡大した時期でした。一方、20世紀はエキュメニカル運動、教会の一致運動が広がった。
- 1910年のエディンバラ宣教会会議はその出発点。1948年に世界教会協議会（WCC）が設立。
- 1997年にルーテル世界連盟（ルターの流れを汲む教会）とローマ・カトリック教会との間で「義認の教理に関する」合意成立。
- 1958年から65年まで第2バチカン公会議でカトリック教会は全面的に刷新

#### ③ 21世紀のキリスト教の課題

- 宗教多元主義

「登り行く麓の道は異なれど、同じ高嶺の月を見るかな」遠藤周作

- 科学技術の急速な進展による諸問題

iPS細胞やクローン技術などによる生命の問題。地球規模で進展する環境問題など